

ヘラクレイトスと自己認識

コンスタンティノス・ブドゥリス*

翻訳・解題 山 川 偉 也**

〔解題〕

この論文は、アテネ大学哲学部コンスタンティノス・I・ブドゥリス (Konstantinos. I. Boudouris) 教授来日 (1986年11月23日～30日) の際、桃山学院大学総合研究所主催による「外国人を囲む研究会」(11月27日)において教授が発表された“Heraclitus and Self-knowledge”を全訳したものである。ただし、訳出にあたっては、後に、ブドゥリス教授から訳者あてに送られてきた英論文の元原稿にあたる現代ギリシア語による原稿“ΗΡΑΚΛΕΙΤΟΣ ΚΑΙ ΑΥΤΟΓΝΩΣΙΑ” (英論文はこのギリシア語による論文を圧縮したものである) が、ブドゥリス教授の示唆にしたがって、底本とされた。

ブドゥリス教授は、ギリシア哲学界を指導する枢要の地位にある。現在、彼は、「ギリシア哲学会」(ΕΛΛΗΝΙΚΗ ΦΙΛΟΣΟΦΙΚΗ ΕΤΑΙΡΕΙΑ) (GREEK PHILOSOPHICAL SOCIETY) の会長として、またギリシア哲学に関する機関誌“Greek Philosophical Review”の編集者として、さらにまた1987年5月にアテネで開催された第三回国際哲学シンポジウム「近・現代における正義論との関係におけるプラトンおよびアリストテレスの正義論」(Plato's and Aristotle's conception of justice in relation to modern and contemporary theories of justice) の組織運営委員会会長として、名実ともにギリシア哲学界を代表するさまざまな活動に携わっている。

ブドゥリス教授は1935年に生まれ、1960年にアテネ大学において古典学および哲学の The

first degree を取得した。1960～1961年に兵役に就いた後、1961年から62年にかけて中等教育課程における古典学と哲学の教育に携わった。その後、1964年にギリシア政府のスカラーシップ基金の援助を得て英国に渡り、ロンドン大学 (Birkbeck College) で近・現代ヨーロッパ哲学の研究に携わり、“MIND” 誌の編集者 D. W. Hamlyn 教授の指導下に哲学における Ph.D 取得課程に進んだ。1970年アテネ大学において Ph.D を取得し、1981年以来アテネ大学哲学部の哲学教授、哲学専攻課程の Chairman である。

彼は「ギリシア哲学会」のみならず“MIND-ASSOCIATION”, “ARISTOTELIAN SOCIETY”, “GREEK HUMANISTIC SOCIETY” などのメンバーとして、ギリシア国内や国外のさまざまな哲学会議に参加してきた (たとえば、Joint Sessions of the MIND Association and the Aristotelian Society, First and Second International Philosophy Symposia, XVIIth World Congress of Philosophy など)。彼はまた「ソフィスト運動」をめぐる第一回国際哲学シンポジウム (The First International Philosophy Symposium on the Sophistic Movement) および「ギリシア哲学における言語と実在に関する第二回国際哲学シンポジウム (The Second International Philosophy Symposium on Language and Reality in Greek Philosophy) の組織運営上の責任者であり、また、「弁証法概念に関する第三回全ギリシア哲学会議」(The Third Panhellenic Philosophy Conference, 1986) の組織運営委員会の長であった。

* アテネ大学哲学部教授

** 本学経済学部教授

ブドゥリス教授は、いま、ATHENIAN LIBRARY OF PHILOSOPHY の編集主幹として、現代ギリシアにおける哲学活動の興隆に力を尽くしているが、彼自身の著作もまたかなりな数にのぼる。著書として出版されたものだけでも優に15冊を越える。そのうち代表的なものは

『魂と国家—プラトンの政治概念—』

(*Soul and State: Plato's conception of politics*, Athens 1972, pp. 300)

『ウィトゲンシュタインの意味論とその哲学との関係』

(*Wittgenstein's theory of meaning and its relation to his Philosophy*, Athens 1972, pp. 300)

『二十世紀英語圏分析哲学』 (*Twentieth century English analytic Philosophy*, Athens 1974, pp. 390)

『ソテクラス以前の哲学』

(*Presocratic Philosophy*, Athens 1975, pp. 191)

『知識論』 (*Theory of Knowledge*, Athens 1976, pp. 224)

『哲学と記号論理学』 (*Philosophy and Symbolic logic*, Athens 1977, pp. 224)

『分析哲学読本』 (*Readings in Analytic Philosophy*, (ed.) Athens 1977, pp. 400)

であろう。

経歴や業績からも推察されるであろうように、ブドゥリス教授の学問的骨格は英国の広義での分析哲学の流れ、とりわけ後期ウィトゲンシュタインや G.E.L. Owen の教説から多くのものを吸収しつつ、形成されたもののようである。そしてそのことは、ここに訳出したヘラクレイトス論においてもうかがわれうと思われる。

ヘラクレイトスを解釈することの困難は、夙に古代末期において知れわたっていた。ディオゲネス・ラエルティオスは、ヘラクレイトスの書き物のなかで溺れないためには熟練した「デロスの潜水夫」を雇わなければならない

とする古代の証言を伝えている。その難解さは、一面には、ブドゥリス教授が本文においても触れているように、ヘラクレイトス自身がデルフォイのシビュラを思わせる暗示に富んだ格言ふうの文体で自分の思想を表現したということにもよるが、他面では、彼に先行するギリシア思想家たちおよび彼以降の思想家たちとの関係におけるヘラクレイトス思想の独自性を奈辺に求めるかという問題に決定を与えることの困難性に由来する。従来の主流的解釈は、ヘラクレイトスをミレトス学派以来の自然学の伝統の流れのなかに位置づけるというものであった。しかし、カーンによる最近の著書 (Charles Kahn, *The Art and Thought of Heraclitus*, Cambridge University Press 1979) のように、彼を自然学者 (Physikos) としてではなく、むしろ自己と社会の両面にわたるギリシアの伝統的諸理念を総合する「人間の条件」を構想した哲学者として見ることも可能である (Kahn, *op. cit.*, 16)。ただし、その場合には、残存ヘラクレイトス断片のうちかなり多く含まれている自然学的内容を伝える断片をどう理解するかという困難な問題が新たに生じてくる。カーンによる解答は、ヘラクレイトス自身は本来の自然哲学者ではなかったけれども、「彼自身の体系は、ミレトス学派の自然学者たちの世界観への応答としてのみ理解されうる」 (*op. cit.*, 19) というものであった。ヘラクレイトス思想の重要な契機として人間学的主題があることを否定することは不可能であろうが、その契機をヘラクレイトスの自然学思想との関係においてどのように評量するかということについては、さまざまな立場がありうる。ウィギンズのように (David Wiggins, "Flux, Fire and material persistence": in M. Schofield and M.C. Nussbaum(ed.), *Language and Logos*, Studies in ancient Greek philosophy presented to G. E. L. Owen, Cambridge University Press, 1982), ヘラクレイトスを伝統的自然学の系譜に属する者として見ながらも、彼の思想の独自性を、ミレトス学派の思想家たちのコスモロジーを改良する試みのなかで人間についての

新しい考え方を提出することになった、という点に見出すこともできるのである。

つまり問題は、ミクロ・コスモスとマクロ・コスモス、自己と大宇宙をめぐるヘラクレイトスの思索をひとつに結びつけているものは何であったか、ということである。人間と自然を統一的に見る視点、ヘラクレイトスの場合それは何であったか。ヘラクレイトスにおける自己と宇宙との照応関係については夙に注目されてきた (Diels, *Herakleitos von Ephesos*, 2nd ed. Berlin 1909; Karl Reinhardt, *Parmenides und die Geschichte der griechischen Philosophie*, Bonn 1916 など)。しかし、その照応関係の事実、ヘラクレイトス断片のいかなる解釈によって裏づけられるのか。

ブドゥリス教授のヘラクレイトス論の特色は、ヘラクレイトスのこの基礎視角を、自然学的探究ではなく「自己探究」に見出し、これを「魂」および「ロゴス」との密接不離な関係において論じている点に求めることができるであろう。もちろんしかし、ヘラクレイトス哲学の主題を「自己探究」に見ようとした者は、ブドゥリス教授が初めてではない。その比較的最近における代表的論者はガスリー (Guthrie, W. K. C.: *A History of Greek Philosophy*, vol. I. pp. xv+5391, Cambridge University Press, 1962) であろう。おそらくはヘラクレイトス哲学の本質についての正鵠を射たこの解釈の方向で、わが国においても、すでに、卓抜重厚な研究が鈴木照雄大阪市立大学名誉教授の手によって打ち出されている (『ヘラクレイトス研究——その魂論を中心に——』、『ギリシア思想論攷』二玄社1982年, pp. 51—155), とりわけその「IV開かれた魂」は、ブドゥリス教授の主張と響きあうものが大である。

問題は、「自己探究」というモチーフを基調とする解釈をヘラクレイトス断片全体のなかでどこまで整合的・統一的に貫きうるかである。ブドゥリス論文の特色は、ヘラクレイトス哲学の基礎的主题を人間の実存的条件の解明にあるとし、これを「共通ロゴス」についてのヘラクレイトスの発言と密接に関連せしめながら展開し

ているところに求めることができるであろう。その議論は、「共通世界」と「私的世界」の連関にかかわって「言語」と「知識」を主題とすることにより、すぐれて現代的な問題を提起することになった、と訳者には思われる。知識や言語の問題を重要なひとつの焦点とするものであることにおいて、ブドゥリス論文はハッセイによる論文「ヘラクレイトスにおける知識論と意味」 (Edward Hussey, "Epistemology and Meaning in Heraclitus": in M. Schofield and M.C. Nussbaum (ed.), *Language and Logos*) と比較されうる側面をもつ。しかし、ハッセイ論文はきわめて現代的な発想と分析を手法としながら、結局、ヘラクレイトス思想の核心を「自己探究」というすぐれて哲学的な主題においては貫きえず、ヘラクレイトス思想の歴史的意義への関心のある程度満足させてくれるものにとどまった、と訳者には思われる。しかしながら、カーンが言うように、ヘラクレイトスこそは、ソクラテス以前のギリシア哲学者たちのなかでおそらくただひとり、その思想がたんなる歴史的関心の対象となるだけではなく、今日においてもなお、そこから古代ギリシア思想の研究家だけではなく、一般のひとびとが、人間や世界についてのさまざまな思索の糧を汲みあげることのできる思想家なのである (Kahn, *op. cit.*, p. ix)。そうしたヘラクレイトス思想がもつ豊穡さのひとつの側面としての社会・政治思想領域への通路を、ブドゥリス論文は「共通ロゴス」概念の解明を通じて開いている。本論文のすぐれた一面であろう (ブドゥリス教授には本論文とは別にヘラクレイトスの政治哲学に関する論文があるが、ここでは紹介しない)。

従来、日本のギリシア思想関係の学界では、欧米のギリシア思想研究には注意を払っても、ギリシア思想——いや哲学そのもの——の誕生の地であるギリシアでいまだどのような研究がなされているのか、その基礎となる学会や組織としてどのようなものがあるのかといったことについて、不思議なことに関心が払われてこなかった。ギリシアは観光地ではあっても、もはや

哲学の国ではない、と思われているのであろう。

しかし、古代ギリシアと日本との関わりがなかに、新たに「現代ギリシア」という第三項を挿入すべき時代が来ていると思う。ブドゥリス

〔翻訳〕

プラトンが語り伝えるところ¹⁾によりますと、かつてギリシアの七賢人²⁾が一堂に会したことがあったということです。七人の賢人は熟考した末に、自分たちの知恵の結晶たる二つの箴言、すなわち

《汝自らを知れ》(Γνῶθι σαυτόν)³⁾

および

《何事も度を過ごすことなかれ》

(Μηδὲν ἄγαν)⁴⁾

を、デルフォイのアポロンに捧献することにした、ということです。

プラトンによるこの証言は、歴史的裏付けを有するか否かにはかかわらず⁵⁾、重要です。と申しますのも、アルカイック時代のギリシア人たちの思考がどういうものであったかを、それ

論文の紹介がそのささやかな第一歩となってくれることを期待して、訳出の労をとった次第である。

が明らかにしてくれるからであります。彼らの社会・政治的思考は、それがめざした実際的发展方向とは別に、あるいはむしろその実際性・現実性のゆえにこそ、これらの箴言が宣べ伝えるものに合致する方向へと導かれたのでした。

賢人たちの捧物はアポロンによって嘉納され、デルフォイの神殿のプロピュライア(前門)に、碑銘として刻されるにいたりしました。こうして、光の神であるとともに謎かけの神でもあるところのアポロンは、彼の神殿を訪なうすべてのひとびとに、同時に命令でもあるひとつの挨拶、すなわち「自分みずからを知るように」(“Γνῶθι σαυτόν”)という呼びかけの挨拶を送ることとなりました。ところでしかし当時のギリシア人たちにとりましては、この命令を受け入れることは、なるほどたしかに、まったく自然なことであり余儀ないことであったとは申しまでも、ではいったいこの命令の意味するものは何であるのか、これに一義的解答を与えることは、まったくもって困難なことであったのです。

デルフォイの神が求めたもの、それはいったい何だったのでしょくか。ひとびとに彼が求めたところのもの、それが重大なことであったのなら、何故、彼はみずから、自分の求めるものが何であるかを、まぎれもない仕方、ひとびとに示すことをしなかったのでしょうか⁶⁾。と申しますのも彼の神殿は、ひとびとに権威ある答えを与えることのゆえに有名であったはずなのですから。神は何故、その命令の意味を、みずからはっきり述べることをしないまま、その解明を、ひとびとの双肩に重荷として担わせる

1) *Protagoras* 343a

2) 「七賢人」(‘Επτά σοφοί)という言葉は、社会生活や政治生活において傑出したはたらきをしたひとびとを含む一群の著名人たちを指していわれる。もちろんしかしこのことは、これらの賢人たちが七名にかぎられていたということを意味するものではない。七賢人が一堂に会した(κοινῇ συνελθόντες)ということについてのプラトンの発言は、証拠だてられるような性質のものではない。

3) この箴言はスパルタ人キロンに帰せられる(Diels-Kranz, *FVS*, p. 63)。

4) この箴言はアテネ人ソロンに帰せられる(Diels-Kranz, *op. cit.* p. 63)。これらの箴言の実際の生みの親が誰であるかにはかかわらず、これらは重要であって、その重要性は、これらが普遍的に受け入れられたという事実にある。

5) いずれにしても、この箴言は、プラトンの時代には抹消されてしまっていた(*Charmides*, 164 d ff. を参照)。このことは、他のことはさておき、デルフォイの箴言の重要性がすでに多くのひとびとの注意をひくものではなくなってしまうということをはっきりさせるものである。

6) Heraclitus B93: 「デルフォイにいます主なる神の託宣は、明らかに述べることも隠すこともせず、ただ徴をみせる」(‘Ο ἀναξ οὐδὲ τὸ μαντεῖόν ἐστι τὸ ἐν Δελφοῖς, οὔτε λέγει οὔτε κρύπτει ἀλλὰ σημαίνει.)

ことにしたのでありましょうか。

この問いに対する答えの一部は、自己認識に精励すべきなのは個々の人間であって、そうした仕事は神にとっては意味をなさない、というものであります。たとえアポロン神みずからが、人間の本性について、寸言ふうの短い表現によってではなく、巨細にわたるなんらかの陳述をなしえたところで、彼はそれを、ひとそれぞれが個人としてもつありとあらゆる生まれつきや境遇までを網羅するひとつの陳述としては、定式化しえなかったでありましょう⁷⁾。アポロンが個々の人間に自知を呼びかけたのは、正しいことでした。みずから自知に励むとき、そのときだけ、ひとびとは自分自身をなんらか益することができからです⁸⁾。わたしたちの本性についての具体的な知識は、もしそれがわたしたち自身の刻苦勉励の結晶としてではなく、どこか別のところすでに成ったものとして手渡されるのだとしますと、わたしたちには何の実際の価値も倫理的価値もないことになるでしょう。

さて、こんなふうに事態がなっているのだとしますと、神による自知の要請にひとつの解答を与え、ひいてはこの答が実質的に含む内容をもって、他のひとびとの自己理解を助けることができると考えたギリシア人たち（あるいは他の国の誰であれ）の努力⁹⁾には、いったいどういう意味があるというのでしょうか。もしかしたら、そうした事態も成り立ちうると、フォイボス・アポロンは認めたのかもしれませんが、にもかかわらずそうした仕事を引き受けることによって生じる責任は、これを個々の人間に委ねたということなのでしょう。

7) うたがいもなくデルフォイの神は、誰かある人物によってなされた行為のなりゆきが、同じ目的のために別の人物によってなされた行為のそれに必ず合致するというふうにはなっていないということを理解するに十分な知恵を持っていた。そして彼はまた、個別的存在としての人間たちがひとしなみにみられうるとも信じなかったのである。

8) このことが重要な意味をもつものであって、ギリシア人たちにとって示唆に富むものであったことについては、プラトンが『カルミデス』において書いているところから明らかである。

9) たとえばソクラテスやプラトンを念頭に置くことができる。

いずれにしてもデルフォイのアポロンは、みずからの命令の意味をはっきりと述べることをせず、しかも、あるひとびとが自知に励み、そのことによって得た知見を他のひとびとのために役立てるといったケースを排除することはしなかったわけですが、このことはしかし、何事も明瞭に告知しないことによって成り立っていたデルフォイの神殿がみずからの戦術としたものに、違反するものではなかったわけ¹⁰⁾です。

二

エフェソスのヘラクレイトス (BC540—480) の思想は、デルフォイの神の命令—「汝自らを知れ」(Γνῶθι σεαυτόν)—にひとつの解答を与えようとする努力の成果としてなった、とみなされるべきであります。ヘラクレイトスは神の命令を遵守しました。しかし彼は、わたしたちにとっては不幸なことに、アポロン神の戦術に呼応する謎めいた仕方、みずからの探究の成果を定式化しました。彼の思想を解明するには、実際、アポロンの託宣の意味を解釈するに等しい努力が要求されるのです。

ヘラクレイトスはアポロン神の命令の重さと権威を異議なく認めました。ですから彼は、「自己自身を知るということは、そもそも可能であるか」¹¹⁾ という、哲学者ならばおそらく最初に立てなければならなかったかもしれない重要な問いをみずからに課したとは思われません。そのような問いを立てることは、神の意思にたいする信頼の欠如を意味したことでしょう。ヘラクレイトスは露ほども神の命令にたいして疑いを抱きませんでした。こうしてヘラクレイトスは神を信じ、おおいなる熱意をもって、自己自身を知るとはいかなることであるかという問題

10) デルフォイの主なる神アポロンの策略のうちに、弁証的矛盾の駆使があったことは注目し得る。光の神としてのアポロンは、隠す神でもあって、物事を明瞭に告げ知らせないのである。ヘラクレイトスは当然この事実を見逃さなかった。

11) もしエフェソスの哲学者がこの問いをみずから立てたならば、おそらく彼は自己自身の探究を企てなかったに相違ない (Ἀπιστή διαφύγαντι μὴ γινώσκεισθαι=不信が彼らの知恵の獲得を妨げる)。

を考察する仕事に、没頭することとなったのです¹²⁾。その結果、彼は、古代末期文献資料の証言によりますと、自己自身の本性を見出そうとするみずからの探究を通じてすべてのことを学び知った、ということであります¹³⁾。逆説的な響きをもつ証言ではありますが、これを疑うべきなんの理由もありません。

デルフォイの神の命令を遵守することは、こうして、ヘラクレイトス自身にとってたしかに大きな意味があったのです。そして同じことは、もちろん、彼の探究の成果についても言われうることです。ではしかし、ヘラクレイトスによる探究の意義は、それに尽きるのでありましょうか。それとも、その探究は、ヘラクレイトス自身にたいしてだけでなく、これを越えて、ヘラクレイトス以外のひとびとをも益するなんらかの意義をもつものであったのでしょうか。つまり、ヘラクレイトスの自己探究から引き出されうるなんらかの一般的な意義があるのでしょうか。

ヘラクレイトスこそ、自己の探究が何を意味するものであるのかを、また自己探究のための適切な方法とは結局いかなるものであるのかを、充分よく了解した最初のギリシア哲学者である。これが、わたしの主張であります。わたしのこの所見は、もちろん、個々特定のヘラクレイトス断片だけに依拠するものではありません。むしろわたしは、この所見をヘラクレイトスの残存断片全体へのめくばりにもとづく理解と総合的解釈から打ち出すのです。以下に展開されるヘラクレイトス解釈の一般的方向を定めるものとして、わたしは、ヘラクレイトス哲学のキー・コンセプト—すなわち「ロゴス」、「魂」、「争い」、「変化」、「共通者」—に言及するでありましょう¹⁴⁾。

ヘラクレイトスは、たぶんなにか誇りのような感情をこめて

「わたしはわたし自身を探究した」(*ἐδίζησάμην ἐμεαυτόν*)¹⁵⁾

と語っています。この言葉は、ヘラクレイトスが自分自身を探究し、自己認識を命じた神の言葉にしたがって企てた仕事を首尾よく成し遂げたということ¹⁶⁾、を明らかにしています。上の断片における「ディゼーマイ」(*δίζημαι*)¹⁷⁾という動詞は、わたしたちの外のどこかに存在していて、わたしたちの注意を免れ隠されてある何物かの探究を指すものとして、使用されております。

したがって、この言葉でヘラクレイトスが言おうとしているのは、「わたしは神の命令に従った。そして隠されてあるものを発見するにいたった。そこでわたしはあなたがたに、わたしが発見したところのものについて語ろう」とい

Guthrie, *A History of Greek Philosophy*, CUP 1962; C. Kahn, *The Art and Thought of Heraclitus*, Cambridge 1979; J. Barnes, *The Presocratic Philosophers*, Routledge and Kegan Paul 1982 を参照のこと。さらに G. Vlastos による重要な研究 “Equality and Justice in Early Greek cosmologies”, “Theology and Philosophy in early Greek thought” さらにまた “On Heraclitus” (これらの論文は D. J. Furley and R. E. Allen (ed.), *Studies in Presocratic Philosophy I* に収められている)。さらに、H. Fränkel, “A Thought Pattern in Heraclitus” および Uvo Hölscher, “Paradox, Simile and Gnostic Utterance in Heraclitus” in: Alexander P. D. Mourelatos, *The Presocratics*, Garden City, New York 1974 ならびにまた D. Wiggins, “Heraclitus’ conceptions of flux, fire and material persistence” および E. Hussey, “Epistemology and Meaning in Heraclitus” in: M. Schofield and Martha Nussbaum, *Language and Logos*, Cambridge University Press, 1982 をも参照のこと。

15) B 101

16) もちろんこのことは、すべて新たな探究は益するところがないなどということを意味するものではない。断片45を考慮することにより、こういう解釈は排除できる。

17) A. Mourelatos, *The Route of Parmenides*, Yale University Press 1970, pp.67—68

12) 断片22を参照。

13) Diels-Kranz, *op. cit.*, A1, 5: “μαθεῖν πάντα παρ’ ἐαυτοῦ”. この情報を疑うべきなんの理由も存在しない。

14) ヘラクレイトス解釈には大きな困難が伴う。この主題に関して G. S. Kirk, *Heraclitus: The Cosmic Fragments*, Cambridge University Press 1954; M. Marcovich, *Heraclitus*, Merida 1967;

うことだと思われまゝ。わたしたちに隠されており、しかもわたしたちが知らなければならないものとは、きわめて重要なもの、わたしたち人間存在の本質、であります。表面的で束の間にも過ぎ去るような人間の観念、そのようなものを把持することは、どのみち大切なことではありません。實在に根ざした人間の観念こそが問題であります、これをわたしたちが獲得しうるのは、目的とするものの確在を信じ¹⁸⁾、真剣に試みる充分な用意をしたうえで、大地深く隠されてある黄金¹⁹⁾にもたぐえられるものを掘り出すときのみであります。

断片101, 18, 22, 116, 119, 123が示すヘラクレイトスのこうした考え方から、人間本性に関するひとつの新しい思想が、ヘラクレイトスの思考のなかにはっきりと懐胎されていることが明らかになります。この思想によれば、わたしたちは、人間において本質的で、しかも隠されてあるものを²⁰⁾、非本質的で表面的なものから区別しなければならず、それと同時に、これらの区別が密接に連関しあって同じ本性に属するものであることをも、見分けなければならないのです。

ヘラクレイトスは強調します、人間は自分の真の本性、すなわち心的・道徳的諸特性の帰属する基体であって、かつ身体とは異なる何物かとしての自分の魂(プシュケー)を発見することに努めざるをえないようになっている、と。すべての人間は、人間であるかぎり、この種の

探究を行なうことを余儀なくされるのだ、と。

「自己自身を知ること、よく思慮を働かせるということは、すべての人間の持ち分である」(断片116)(*ἀνθρώποισι πᾶσι μέτεστι γινώσκειν ἑαυτοὺς καὶ σωφρονεῖν*)

しかし、自己の魂の人間による探究は、魂なるものがおのれを隠すことを好むものであるゆえに、果てしないものとなります。多くの問いかけを通じてはじめて、それは自らの姿を顕わすのです。問いかけをなすごとに魂は、新たな啓示をもたらすことになります。これらの考えは、次の重要な断片に言い表されております。

「魂の限界を、おまえは見出すことはできないであろう、たとえおまえがありとある道をへめぐり歩いたとしても。それほどまでに、そのロゴスへの関わりは深いのだ」(*Ψυχῆς πείρατα ἴδων οὐκ ἂν ἐξεύροιο πᾶσαν ἐπιπορευόμενος ὁδὸν· οὕτω βαθὺν λόγον ἔχει.*) (断片45)

四

ここでわたしはギリシア哲学、とりわけヘラクレイトス思想に関するハイデッガーの解釈に言及しておきたいと思ひます²¹⁾。M. ハイデッガーが主張するところによりますと、人間は、その本性において、「存在」がそこでみずからを顕在化する「場所」、すなわち Dasein でありまして、人間存在についてのこうした見方そのものが、適切な解釈のもとでは、ヘラクレイトスの諸断片から引き出されうる、というのであります。

問いかけること、また問いかけにおいて問われている当のものを露わならしめること、これらは、人間の存在論的諸特性でありまして、自己認識に導くあらゆる手続きのア・プリオリな条件となるものであります。ものを暴きたてる

18) B 18. 「予期もしない者が予期しえないものを発見するなどありえないであろう。というのもそれは、探査のきかないもの、足跡をたどりえないものだからである」

(*ἐὰν μὴ ἔλπηται, ἀνέλπιστον οὐκ ἐξευρήσει, ἀνεξερεύνητον ἔαν καὶ ἄπορον*)

19) 断片22「黄金を採る者はたくさんの土を掘りかえして僅かのものをみつける」(*χρυσὸν γὰρ οἱ διζήμενοι γῆν πολλὴν ὀρύσσουσι καὶ εὐρίσκουσι ὀλίγον*) この断片および断片 B101 における“*διζημαί*”という動詞の使用に注目せよ。

20) 「自然はみずからを隠すことを好む」(*Φύσις κρύπτεσθαι φιλεῖ*). この文における「自然」(*φύσις*)に「魂」(*ψυχή*)を置き換えてみよ。そうしても元の断片の意味がおおいに損なわれるといったことはない、と私は信ずる。

21) ハイデッガーの諸著作は別にして、フィンクとハイデッガーによる *Heraklit*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main 1970 (およびこの著作の翻訳 *Heracitus Seminar* 1966/1967 University of Alabama Press 1979) を参照。なおまた、John Sallis-K. Maly (ed.), *Heracleitan Fragments*, University of Alabama Press 1980 をも参照。

魂の本性と自己認識との関係が、断片45において非常にうまいこと説明されております。この断片によりますと、わたしたちが行なう魂についてのどのような探究も、新しい啓示が下される可能性がつねに開かれたものでありつづけるために、最終ということはありません、したがってまた、わたしたちの旅が終局に達することもありません、ということになります。

マルチン・ハイデッガーは言います、人間はロゴスを了解しうる、人間はロゴスのほうにさし向けられている、ロゴスはあらゆる存在者を前面にもたらし、集約し、それらの現前を感知せしめるのだ、と。すべての人間がロゴスを了解しうるようなものとなっていることは、ハイデッガーによれば、断片16によって示されています。

「いったい誰が、けっして沈むことのないものを前にして、隠されたままでありえようか」

(*Tò μὴ δύνον ποτε πῶς ἄν τις λάθοι*)

「けっして沈むことのないもの」とは、明らかに、ロゴスのことです²²⁾。存在者を人間の意識に現前せしめることによって、すでにそれは、みずからを顕すべくそこに存在するわけです。人間の魂へのロゴスによる存在者の現前化はしかし、当然、人間の実存的条件と結びついております。そしてこのことは人間が、存在論的には、存在と自己自身を問うという仕事を引き受けるべく備えられてはあるのだが、実際には、このことを必ず、しかもしばしば、なすわけではない、ということの意味します。目覚めてある者のみが、有意味にしかも真剣に、

「魂を持つとはいかなることであり、そしてひとはそのことについてどのような知識を持つことが許されるのか」

と問うことができるのです。ヘラクレイトスはこのように信じていたと思われます。

さてヘラクレイトスは、魂をもつことと知識をもつこと、これらの相互関係とそのロゴスに

対する関係を基準として用いることによって、人間のあり方と社会的行為を評量にかけます。こういうヘラクレイトスの態度も、存在論的立場に立脚しています。彼は人間を社会学的観点から記述しようとしているのではなく、むしろ世に生きてある (*In-der-Welt-Sein*) とは何であるかを明らかにすべく、また「魂を持つとはいかなることであるか」という問いと「世に生きるとは人間にとっていかなることを意味するか」という問い、これら二つの問いの間の連関を明らかにすべく、人間の状況に言及しているのです。こうして、自己認識についての問いは、人間とは何であるかという問いと、区別されはいたしますが、密接に結びついているのです。

五

社会における人間のあり方について、ヘラクレイトスは三種類の人間のカテゴリー、すなわち「多衆」、(悟りをひらいていない)「著名人」および「目覚めた者」の区別を立てます。彼は、多衆と著名人の双方を論難します。前者はまるで盲者のようだ。彼らはロゴスを洞察しない。後者は多くのことを知ってはいる。しかし彼らは、自分たちの多彩な経験のうちに、これらの本質を見失っている、と。ヘラクレイトスのこういう見方は、次に挙げる多くの断片、すなわち1, 2, 17, 34, 40, 50, 72, 73, 113および116のうちに表明されております。

B 1 「ロゴスはこういう本性のものとしてあるのだけれども、それを聞く前にも聞いた後にも、ひとびとはこれを了解するのに失敗する。あらゆる事柄は、ロゴスにしたがって生ずるのだけれども、ひとびとは私が、それぞれのものをその本性にしたがって区別し、それらがいかにあるかを告げ発表したような言葉や仕事を試みながら、まるで試みたことがない者であるかのようである。しかし、他のひとたちは、彼らが眠っているときややっていることを忘れているのとまったく同じように、彼らが目覚めているときややっていることに無頓着である」

22) ハイデッガーによれば、たんに人間だけがではなく神々もまたこの能力をもつ。

Sallis-Maly, *op. cit.*, p.57. この研究の最初に言われたように、このことはアポロンについてもあてはまることである。

(τοῦ δὲ λόγου τοῦδε' ἐόντος αἰεὶ ἀξύνε-
τοι γίνονται ἄνθρωποι καὶ πρόσθεν ἢ ἀκ-
οῦσαι καὶ ἀκούσαντες τὸ πρῶτον· γινομέ-
νων γὰρ πάντων κατὰ τὸν λόγον τόνδε
ἀπείροισιν ἐοίκασι, πειρώμενοι καὶ ἐπέων
καὶ ἔργων τοιούτων, ὁκοίων ἐγὼ διηγεῖμαι
κατὰ φύσιν διαιρέων ἕκαστον καὶ φρά-
ζων ὅπως ἔχει. τοὺς δὲ ἄλλους ἀνθρώπους
λανθάνει ὁκόσα ἐγερθέντες ποιοῦσιν, ὁκώ-
σπερ ὁκόσα εὐδοντες ἐπιλανθάνονται.)

- B 2 「それゆえ、存在者に共通であるものに
つき従い、これを固守することが必要で
ある。しかるに、ロゴスは存在者に共通
であるものを本来的な仕方で示すもので
あるのに、多衆はまるで、すべての個人
が自己了解（感覚）を持っているかのよ
うに生きつづける」

(Διὸ δεῖ ἔπεσθαι τῷ ξυνῶ... τοῦ λόγου
δ' ἐόντος ξυνού ζώουσιν οἱ πολλοί ὡς
ἰδίαν ἔχοντες φρόνησιν)

- B 17 「多衆は、彼らが出会うがままなる事柄
を熟慮しもせず、彼らの経験するものを
認識もしないまま、自分たち自身の意見
を信じている」

(οὐ γὰρ φρονεύσι τοιαῦτα οἱ πολλοί,
ὁκόσοι ἐγκυρεῦσιν, οὐδὲ μαθόντες γινώ-
σκουσιν, ἐωυτοῖσι δὲ δοκέουσι)

- B 34 「理解することなく、彼らは聾者のごと
く聴く。『居ても居ない』という文句は
彼らを証言するものである」

(ἀξύνετοι ἀκούσαντες κωφοῖσιν ἐοίκα-
σιν· φάτις αὐτοῖσι μαρτυρεῖ παρεόντας
ἀπεῖναι)

- B 40 「多く学習することは理解することを教
えはしない。もしそうだったら、それは
ヘシオドスやピュタゴラス、それにまた
クセノフエネスやヘカタイオスをも教え
たことであろう」

(πολυμαθίην νόον ἔχει οὐ διδάσκει
'Ησιόδον γὰρ ἂν ἐδίδαξε καὶ Πυθαγόρην
αὐτίς τε Ξενοφάνεά τε καὶ Ἑκαταῖον)

- B 50 「私にではなくロゴスに耳傾け、万物は

一であることを認めるのが賢明なこと
である」

(Οὐκ ἐμοῦ, ἀλλὰ τοῦ λόγου ἀκούσαντας
ὁμολογεῖν σοφόν ἐστὶν ἐν πάντα εἶναι)

- B 72 「彼らは自分たちが最も頻繁に交わっ
ているもの、すなわちロゴスに関して奇妙
な具合になっている。そして彼らが日ご
とにでくわすものが、彼らには見知らぬ
ものにみえるのである」

(ὃ μάλιστα διηγεκῶς ὁμιλοῦσι λόγῳ,
τούτῳ διαφέρονται, καὶ οἷς καθ' ἡμέραν
ἐγκυροῦσι, ταῦτα αὐτοῖς ξένα φαίνεται)

- B 73 「眠っている人間のような言動があつて
はならない」

(Οὐ δὴ ὥσπερ καθεύδοντας ποιεῖν καὶ
λέγειν)

- B 113 「思慮を働かせることは万人に分け
与えられている」

(ξυνόν ἐστι πᾶσι τὸ φρονεῖν)

- B 116 「自己自身を知るということ、よく思
慮を働かせるということは、すべての人
間の持ち分である」

(Ἀνθρώποις πᾶσι μέτεστι γινώσκειν
ἑαυτοὺς καὶ σωφρονεῖν)

人間はすべて自知によって精神の健全さを獲
得し、ロゴスを了解する潜在的能力をもつ (2,
113, 116) のだけれども、多衆はまるで盲者か
聾者であるかのように、自分たちの私的世界に
生きていて、共通者たるロゴスに真に耳を傾け
ようとしな。そして、ヘラクレイトスに先立
つ著名な哲学者たちはといえ、多くのことを
見て理解はしたものの、それらの本質たるロゴ
スを把握するには至らなかった、とこれらの断
片は告げます。

しかし、これらのひとびとは別個に、「ひと
つの、共有される世界」に住まう目覚めた人物
がおります。断片89でとりわけ強調されている
のはこのことです。

「目覚めた人間の世界はひとつで共有される
ものであるが、眠っている人間はおのがじし、
みずからの私的世界へと逸れていく」

(Τοῖς ἐγρηγόροσιν ἓνα καὶ κοινὸν κόσμον

εἶναι, τῶν δὲ κοίτωντων ἑκάστων εἰς ἴδιον ἀποστρέφεσθαι)

目覚めた人とは知識を所有している者のことではありません。そうではなくて、存在者を一なるものに集約し、そのことによって自らを顕すロゴスのメッセージを、その精神 (νόες) によって把握すべく見張っている者のことです(断片50)。目覚めた人とは、諸事物をその統一的姿において了解しうる者、その見張りにおいて、登りくるものと沈みゆくもの、点火と消火を、たち現れてくるものと忘却のうちへ引き退いていくものとを、見分けることのできる者のことです。明らかに、自己探究を開始することができるのは、これらのひとびとのみであります。自己の究極的本質とは、自らを隠しかつ顕すことだからです。

多衆を論難するなかでヘラクレイトスは、彼ら多衆がふさわしからぬ生活を送っていること、何物をも予期していないこと、真に賢明な人物や目覚めた人物を信じないこと、しかもそのことによって太陽に彼らの眼を閉ざしていること、を弾劾します。もしも彼らが目覚めたひとびとの知恵に注意を払ったならば、彼らの生き方は違っていたかもしれないのだ、と。ヘラクレイトスは、さらに、あらゆる時代に、一群の注意深いひとびとが存在したこと、そしてそれらのひとびとが、ひとつの共通な世界に生きていたことを、信じていたように思われます。しかもそう信じたことにおいて、彼は正しかったのだと思われます。エフェソスにはヘラクレイトスが、インドには仏陀(BC560—448)が、そして中国には孔子(BC551—479)がいました。これらのひとびとは、ハイデッガー流に言えば、「存在の牧者」と呼ばれてよい人々でありましょう。彼らは彼らの時代に、ロゴスの意味するところを把握したからであります。わたしたちは、ここで、この主題をいまい少し力説し、次のように問うてみましょう。

仏陀という名前の語源(サンスクリット語でのBUD)が、元来、いつも目覚めており物事を知解する者を指す²³⁾ものであったのは、偶然の

ことでしょうか。弟子たちへの仏陀の最後の言葉が、「生じ存在し造られたすべてのものは没落する定めとなっている。あなたたち自身を救うべく目覚めていなさい²⁴⁾」であったことは、これまた偶然のことでしょうか。

六

わたしたちが見てまいりましたように、ヘラクレイトスは、ロゴスの理解と自己認識の努力を相互に関連しあったものとして把握しております。では、「ロゴス」なる語によって、ヘラクレイトスは何を言おうとしているのでしょうか。ロゴスは万物に共通するもの(断片1, 2)、普遍者であります。万物を操縦し、支配する、永遠に燃える火であります。それは根本的な意味での万物の第一原理であります。万物は一である。これが、ロゴスの意味であります。

ロゴスとは、こうして、存在者の第一原理なのです。それは、すべてのものを集約する原因、反対物ですらを相互に関連づけ、ひとつの力動的統一体の構成要素たらしめる原因です。諸存在者は絶えざる変化のうちにあります。しかしその変化の範囲は、ロゴスによって確定されています。これが、ロゴスについてのヘラクレイトスの教説です。しかしわたしたちの目下の企図との関連において注目されますのは、ヘラクレイトスが、自分の哲学のこの第一原理に、コミュニケーションの手段であるとともに政治的共同生活の基本的原理であって、切り離しがたい仕方と言語と結びついている「ロゴス」という名称を与えたということであります。

有意義な発言、そしてまた合理性として理解されるところの人間の共通ロゴスと都市国家に

velopment, Harper Torchbooks 1975, p.139
を見よ。「しかしながら Buddha とは、あらゆるときに目覚めている者のことである。そして、サンスクリット語の語根“BUDH”は、『目覚める』および『知る』の双方に関連する」

24) このこととの関連において『大パリニッパナ経』(*Maha-Parinibbana Sutta*)における「すべての条件をもって存在するものには没落しゆくことが定められてある。勤め励めよ」という仏陀の言葉を参照(Trevoir Ling, *The Buddha's philosophy of man, Early Indian Buddhist Dialogues*. Everyman's Library, London 1981 p.240

23) E. Conze, *Buddhism: its essentials and de-*

共有される共通ロゴス双方の「ロゴス」なるもののへ関係は、わたしたちが目下のところかわりあっている自己認識の問題にとって重要な意味をもちます。

ヘラクレイトスは彼自身の探究において多くのことを観察することができました。彼は次のことを観察いたしました。

- A 自分の内部に、移り変わる感情、欲望、激情からなる小世界があること²⁵⁾
- B 激情、欲望その他の内的傾向性は、ときには、人間の魂（すなわち人間理性）が抵抗しえないほど強力なものとなりうること²⁶⁾
- C 一定の心的状態（たとえば夢など）²⁷⁾は、ある程度は実在に対応するものであること
- D 想像力は実在しない諸対象を作りだし、実在の対象を増加させる力をもつこと
- E 思考は、ときには不明瞭で混乱したものになりうること²⁸⁾
- F われわれの感覚²⁹⁾は世界についての正しい情報をかならずしもつねにもたらすものではないこと
- G 人間は、対立しあう諸力からなる内的闘争によって支配されるけれども、よく思惟し、信ずるに足る仕方でも語り、正しいふるまいをなすことができること³⁰⁾

ヘラクレイトスはこれらすべてを観察した結果、自分がまるで大麦でできる混合飲料（κυνεών）³¹⁾ みたいに、感情や思想の流れにひっきりなしに支配されていて、河の流れにたぐえられるようなものだという結論に達しました。彼はまた同様に、自分の内的状態のすべてが、なにかつくりだされたもので、一性を保っているということ、そしてこの何物かは肉体ではかならずしもない、という考えをもつにいたりしました。

25) 断片 77, 125a はこの結論に導く。人間本性の変転については重要な断片 78 を参照。

26) 断片 85 および 43 を参照。

27) 断片 1, 73, 75 を参照。

28) 断片 117 を参照。

29) 断片 107, 55 を参照。

30) 断片 112, 115, 116, 118 を参照。

31) 断片 125 を参照。

七

たぶん、こういう観察なら、ヘラクレイトスならずとも他の目覚めたひとびとによってもなされえたことでありましょう。しかしヘラクレイトスは、ひとりの哲学者として、さらに次のような問いをも立てたようなのです。

- 1) はたしてこういうものが、神の意思にしたがって私が探究してきたものなのであるうか。そして、存在するのはこれらだけであるということを、私はどのようにして確信することができるのであろうか。³²⁾
- 2) 私が発見したものが、はたして夢とか想像力の所産でしかないのではないということ、私はどのようにして知りうるであらうか。

ヘラクレイトスが最初の問いをみずからに問うたと考えるべき十分な理由があります。あなたが未知のものの探究に乗りだしていくとき、どのみちあなたは、「自分がたまたまそれにくわすことになったとき、いったい自分は、それを自分が発見したということについて、どのようにして確信することができるのであろうか」という問いに、直面せざるをえないのです。

これらの問いのうちの最初のものにたいするヘラクレイトスの答えは、たぶん、自分がたとえ神の命令に従順であったとしても、探究してきたものを見出したと自分では確信できない、というものであったことでしょう。彼がこのように答えたであらうことは、断片 45, 115 および 116 によって部分的には確かなこととされます。しかしながら彼はまた、次のようにも主張したことでしょう。自分が探し求めてきたものを見出したと自分では確信できない、その理由そのものは、自分のなした探究が無益であったことの証明にはならないのであって、それはただ、正しい探究の方法を求めることへとわれわれを鼓舞するだけのことであり、と。

第二の問いにたいしエフェソスの哲学者は、

32) プラトン『メノン』篇 (80d-e) における有名なパラドックスを参照。このパラドックスは、探究対象の直接的知識 (knowledge by acquaintance) を仮定するとただちに生じてくる。

自分の仕事に着手する以前には、それを意識すらしていなかった或る種の経験を、自分はさまざまなことを省察するなかで持つにいたった、と答えたことでありましょう。もちろん彼には、さらにそれ以上、これらの経験がはっきり実在的なものであると主張することは困難であったことでしょう。彼は、夢のような経験や主観的にすぎない私的世界が存在することに充分に気づいておりましたので、これらについてそれ以上たちいった議論をすることは避けようとしたことでありましょう。事実、彼はその存在に気づき、これを「私的世界」(*ἴδιος κόσμος*)と呼んだ最初の人物なのであります。³³⁾

これらは、わたしたちが上に見てまいりましたように、ひとを誤解に導くことでも陳腐なことでもない何事かを誰かが言おうとするときには、生じてくる問いであります。しかし、陳腐さを避けようとするだけでは、なにか価値ある新しいことに光を投げかけることにはなりません。かえってひとは、その場合に、行きづまりのなかにある自分をみいだすことになるかもしれないのです。この困難を回避するためにヘラクレイトスは、自分の経験を他のひとびとのそれに関連づけなければならなかったでありましょう。しかしその関連づけは、もちろん次のような議論を援用することによっては達成できません。すなわち、「自分は他のひとびととともに人間であって、もろもろの経験を有する。ところで自分はXなる経験をもつ。それゆえ他のひとびとも同じXという経験を有する」と。

どう低く見積もってみましても、この議論の不完全なるゆえんを、ヘラクレイトスは充分な直観をもって洞察した、と思われまします。たとえば、もしもある人物Aの経験したものが他の人物Bによっても経験されるといったことが必然的な仕方では起こるとすれば、それらの人物は、なにか機械のようなものであって人間ではないことになるでありましょう。このようにしてヘラクレイトスは、内的で主観的な世界に滞留し

つづけることを放棄して、外の共通世界に向かう以外の選択を持たなかったのであります。このことが意味するのは、なによりもまず、彼が感覚に依拠せざるをえなかったということです。そして事実、断片55が明らかにするように、ヘラクレイトスが従ったのはまさにこの道でした。

「見ることや聴くこと、経験から学ぶということが何であれ、私が尊重するのはこれである」(*ὅσων ὄψεις, ἀκοή, μάθησις, ταῦτα ἐγὼ προτιμέω*)³⁴⁾

と。この断片がもつ強調的言葉づかいは、個人的で私的な経験は、もしそれを外の世界、それが存在することをなんらか前提しなければならぬ外の世界に関連づけることなしには、これを擁護しようどんな見方も存在しないということ、ヘラクレイトスが完全に正しく理解していた、ということを示しております。

八

わたしたちが感覚に依拠せざるをえないという事実はしかし、それ自体としては、感覚が世界に関する正しい情報をつねに提供するということを意味してはいません。ヘラクレイトスはこの事実に注意を払い、断片34と107において、そのことをはっきりと述べました。

「理解することなく、彼らは聾者のごとく聞く。『居ながら居ない』という文句は彼らを証言するものである」

(*ἀξύνετοι ἀκούσαντες κωφοῖσιν ἐοίκασι. φάτις αὐτοῖσι μαρτυρεῖ παρόντας ἀπεῖναι*)
「眼や耳は、魂が言語を理解することがないなら、人間にとって貧弱な証言である」
(*κακοὶ μάρτυρες ἀνθρώποισιν ὀφθαλμοὶ καὶ ὦτα βαρβάρους ψυχὰς ἐχόντων*)³⁵⁾

断片107によれば、言語を解する魂、すなわち人間のみが、感覚が世界について語ることを、正しく判断することができるのです。このようにして、言語生活に参加することのできる人間能力、すなわち、有意味な諸観念をやりとりす

33) 「共通ロゴス」に対比して「私的」という語を使用することは、実に、現代哲学でのそれに類似している。

34) 断片101aをも参照のこと。

35) この断片の正しい翻訳については、Kahn, *op. cit.*, 106を参照。

ることにより意思疎通を行ない、議論をあれこれと判定し、もろもろの価値判断を行なうことのできる人間の能力のみが、感覚印象をチェックし、内的経験を評価する基準となりうるのです。

ヘラクレイトスのこの見解は

α 第一に、「魂」という語が、ヨーロッパの哲学においてはじめて、人間理性（これの強調点は政治的共同生活に参加しうる人間能力にある）を指すものとして使用されている

β 第二に、歴史上はじめて、（ロゴスとしての）言語が、われわれの心的世界の感覚的経験、事象、諸過程がそれによってこそ判定されなければならないひとつの基準という地位にもちあげられている

という二つの理由によって、非常に意味深いものであります。

共通ロゴスとしての言語が最も深い関わりを有するのは、国家共同体での生活です。それは個々の市民すべてを、共同生活ないし自治のために結合する連関の環であり、同じ理由によってそれはまた、人間の魂と社会に共通なパターンでもあります。ひとは言語を使用することによってはじめて、他のひとびとにも理解できる仕方で、あらゆる経験を表現することができるのです。こうして、すべての経験³⁶⁾、夢であれ感情の動きであれ思想であれが、客観性を獲得するためには、言語というフォーラム（共通広場）にもたらされなければならないのです。ヘラクレイトスによって「私的世界」と矛盾的に対立するものとして意識的に用いられる「共通ロゴス」ならびに「共通世界」なる言葉によって打ち立てられようとする論点の正確な意味が、まさにここにあります。ですから、たしかに、すべての人間がものを考えることができはするのですが、彼らの考えの実質は、語られなければならない何物かとしてのみあるのだということになります。語られることによってはじめて、それらは、それらの本性と価値とがそこにおい

36) こういう経験が存在するという事実をわれわれは排除しえない。

てこそ評価対象となる、ロゴスという「共通世界」のうちに入るのです。

言語によるこの理解は、もしも他の条件が等しいとするなら (certis paribus), 私的で主観的な世界からロゴスという共通世界の領域、そこにおいてこそひとが実在を把握することのできる共通世界領域への道を示すものであるゆえに、きわめて重要であります。しかるに多衆は、自分たちの使っている言葉の真の本性を理解せず、それゆえにまた自分たちの局部的で混乱した、夢のような意見に固執するのであります。³⁷⁾ ヘラクレイトスは言っております、

「彼らは、自分たちが最も頻繁に交渉しているもの、すなわちロゴスとの関係において奇妙な具合にある。そして彼らには、彼らが日常生活においてでくわすものが見知らぬものにみえるのである」

(καὶ ὅτι ᾧ μάλιστα διηνεκῶς ὁμιλοῦσι λόγῳ τούτῳ διαφέρονται, καὶ οἷς καθ' ἡμέρων ἐγκυροῦσι, ταῦτα αὐτοῖς ξένα φαίνεται.)³⁸⁾

と。したがってロゴスは、なによりもまず第一に、社会における人間の共通言語、人間を他の存在者（魂のロゴス）とコミュニケーションすることを許すところのものであり、そして第二に、あらゆる事物の第一の原理であります。共通ロゴスは、その本質において、人間の魂と世界のあいだに、変化が、相違が、平衡が、そしてまた構造的同一性が、存在することを示します。ヘラクレイトスは、彼自身と世界とのあいだに（流動や対立しあう諸力や秩序や整合性といったかたちでの）或る種の類同性が存在することを観察することによって、ロゴスこそは世界の原理であるという結論に導かれました。もちろんこれは、大胆な一般化です。けれどもひとは、あらゆるものを公共領域の一部として見、それゆえにまたこれを、共通的に受け入れられうる基準によって判断する言語なるものに訴えることなくしては、（自分自身や他のひとびと、共同生活や自然的世界に関して）何事をも言いえ

37) 断片 17 : “ἐαυτοῖσι δοκέουσι” (彼ら自身の意見を信ずる)

38) 断片 72

ないのです。この事実の根底に横たわっているのは、実にこの、ヘラクレイトスが一般的な仕方では表現した事柄であります。

自己認識の問題、さらに、われわれのあらゆる経験に関する知識の問題は、ヘラクレイトスによって共通ロゴスなる概念に関連づけられ、そのものとして、まったく革命的な仕方では扱われることとなりました。このことは、エフェソスの哲学者が、自分なりにこの問題と格闘することにおいて、誰にも負けることがなかったということ、ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタインのみが彼に匹敵するただひとりの人物であったということを示すものであります。

ウィットゲンシュタインは、ひとびとが感覚や内的経験に言及する場合に用いられる私的言語があるという主張、この主張を導く観念複合の全体に、鋭く深い省察を加えました。有名な『哲学探究』³⁹⁾のなかで彼は、厳格な議論によって、この主張が混乱したものであることを明らかにしました。わたしたちが自分たちの感覚や経験に言及する場合、共通言語とは異なる意味をもつ語を援用するなんらかの私的言語を用いるわけではない、とウィットゲンシュタインは言います。私的言語という観念はつじつまのあわないものであります。わたしたちの心的世界の出来事や諸過程を指す語に該当する内的な、心的な、不可視な、どんな意味も存在しません。「いわゆる」つきの内的世界なるものは、言語における語の意味を発見し認識する基準として

は役立ちません。それゆえ、わたしたちのなかで生起するものが何であれ、それは、ひとつの社会の共通語を成り立たせる諸命題としてこそ、述べられ表現されなければならないのです。

ヘラクレイトスが、神による《汝自らを知れ》という命令に従って、この〔ウィットゲンシュタインと〕同じ結論に達したのを、わたしたちは見ました。

九

デルフォイのアポロンに対するヘラクレイトスの答〔したがってまた、彼が自分の探究の成果をエフェソスのアルテミス神殿に捧献したということの意味〕は、たぶん、次のようになるでしょう。

「——そうです、主なる神アポロンよ、わたしは、わたし自身を探究しにでかけていき、わたしの内部にまた周囲に起こるあらゆる事柄を、つぶさに観察いたしました。そしていまわたしは、わたしが観察したそれらの事柄がどのようなものであったかに関心をもつすべてのひとびと、ヘラスのわたしの友たちに、遠い国にいるひとりの同時代人、共通世界に住まうひとりの目覚めた人物の語る言葉を、聴いてほしいと思うのです。彼の言葉は、わたしにどのようなことが起こりまた起こらねばならなかったかを確証してくれるものなのです。彼がこんなふうに語るのが聞こえるはずです。

《肉身をただ肉身として洞観して倦むことのない者、その者は、世の常のならいであるむさぼりと怒りのところを捨離し、いきいきと意識的に思慮に充ちた者でありつづけることができる。同様に、感覚をただ感覚として洞観して倦むことのない者、その者は、世の常のならいであるむさぼりと怒りのところを捨離し、いきいきと意識的に思慮に充ちた者でありつづけることができる。そしてさらに、思考をただ思考として、心の状態をただそれにすぎないものとして、洞観して倦むことのない者、その者は、世の常のならいであるむさぼりと怒りのこ

39) 398節、403—420を参照。なお K.Boudouris, *The Theory of Meaning in the Philosophy of L. Wittgenstein*, Sophia Saripoulou Library, Athens 1972, p. 175—181 をも参照。ヘラクレイトスの探究がはたして魂の世界から始められたか、それとも自然的世界から始められたかについて決定が下されなければならないとすれば、ヘラクレイトスをウィットゲンシュタインとの関連裡にもたらず試みがなされるべきであるというハッセイ (Hussey, *op. cit.*, p. 56—59) の見解については、私がいままで述べてきたことをもとにして次のように言うことができる。ヘラクレイトスの探究にもしものなんらかの人間学的モチーフがあったにしても、このことは、知識論の観点からはなんらの重要性をも有するものではない、と。ヘラクレイトスは魂の世界を共通ロゴスに関連づけるからである。

ろを捨離し、いきいきと意識的で思慮に充ちた者でありつづけることができる⁴⁰⁾……同様に、心が生みだすものども、心に現前してくる一切の対象を、内にあるものと外にあるもの、また、内にあるものと外にあるものの双方をいっしょに、心に現前してくるにすぎないものとして洞観して倦むことのない者、それらが心のうちにあって生じては滅んでいくものであることを、その生滅のありかたに即して洞観して倦むことのない者、その者は、「これらは心のうみだしたものである」という意識を保つことにより、少なくとも、自己を知り、自己を目覚めた者としておくには充分なだけ、正気を保っていることができるのである。⁴¹⁾》

——ヘラスの友たちよ、お分かりのように、彼もまた、わたしたちが自分自身を省察しなければならないということ、そしてその省察が、ただたんに知識に導くだけでなく、精神を健全に保つことへも導くのだということを認めております。

——だが友たちよ、諸君は、わたしが心眼でもって省察し、自分の内面に発見したといわれる『わたし自身』なるものについて、言葉を費すべきではないのです。いやそんなことは、まったくもってできないことです。魂や身体は、それら自体としては、省察しません。省察するの

は、人間としてのかぎりにおける人間だけです。しかも、賦活された精神をもつのは、社会のなかに住まうものとしての人間だけなのです。

——諸君にわたしが語ることに、なにか意味があるとするなら、それは、わたしの判断が、共通ロゴスによるものであったからです。言い換えればわたしの判断が、わたしたちの生活と密接に結びついている言語使用の基準によるものであったからです。

——ですから、自分自身を知るということは無益ではないひとつの仕事だと、わたしが君たちに言うとき、そのことは、座りこんでへそを凝視しておればよいということではなくて、君たちの内面や周囲に起こるあらゆることを省察し、最後にはあらゆることを、君たちを理解してくれるひとたちのいる共同社会との関連のうちに置かなければならないということを意味するのです。わたしはまた君たちに、他のひとびととの密接な繋がりにおいてだけ、君たちは君たち自身を知ることができるのだということを、忘れないでほしいと思うのです」。

このように、エフェソスのヘラクレイトスは、アポロンの知恵が提起した《汝自らを知れ》という論題について、語ることができました。そして、この場合にも彼は、たしかに彼なりの比喩的な言いまわしによってではありますが、真実に語ったとすることができるのです。

40) Trevor Ling, *op. cit.*, p. 7 を参照。

41) Trevor Ling, *op. cit.*, p. 83 を参照。